

## 八 クローム鉱業の躍進

### 1 鉱物資源の開発

日高の砂金は寛文蝦夷の大乱によつて人口に喰ふされているが、それ以後現在に至るまで各地に細々と板流しの古来の技法を一步も出ないで、むしろ生活窮迫者の生活を支えてきたといつてよい。銀鉱はかつて幕政時代染黒奥で試掘されたという記録にとどまり、沙流川奥より滑若、静内、三石、狹伏に通ずる低山地帯に埋蔵される概ね厚さ一米以下の褐炭も、開拓使がいち早くライマン技師を派して調査させ、マクンベツ(幕別)煤田のごときが公表されたが、試掘するものごとく失敗して今日に及んでいる。含炭層の西方に、遠く宗谷より日高に及ぶ長大な含油背斜軸が走つていて、厚別川新冠川の沢合には判然とした油徴があり、明治三十年において、既に試掘の許可を得たものだけでも十七筆を算える。大正元年宝田石油会社村井鉱業部は、新冠村大狩部において採掘に着手したが、結果不明のまま第一次世界大戦によつて資財の調達不如意となつて中止した。同鉱区は昭和三年日本石油会社によつて、再び試みられたが失敗に帰した。石灰岩の存在も古くから知られていて、即ち幌別川上流、元浦川上流、三石川上流の各地が代表的なものである。また三石川上流のものには淡紅色大理石に近いものがあり、しばしばこれが採掘を計画するものもあつたが、層面に亀裂が多く成功しなかつた。ただ昭和十六年横似に北海電気(現東邦電化)株式会社日高工場が操業し、同村の石灰岩が採掘されるようになった。そしてその一部は日高線によつて室蘭に送られている。昭和二十六年度は四、八〇六屯を記録している。横似村新様似(新富)の水銀鉱は、粘板岩石灰岩等に遊離水銀として産出し、早くから着眼されたが精煉採取の方法が判然せず、大正十三年ころドイツ人技師をしてこれを研究させたが、企業化するに至らずしてやんだ。石綿は蛇紋岩中に胚胎するものであるが、昭和十七年ころより日高村、三石村等において採行されはじめた。また三石村の所謂蓬萊山附近の古期岩石中の石綿を採取し、工場を東別に

八 クローム鉱業の躍進

二二一

### 第四編 新時代への歩み

二二二

設置していたが原料欠乏のため休止してしまつた。右左府(日高)鉱山は昭和二十五年八八、四〇〇屯を産出している。門別町庫富のベントナイトは新第三系の凝灰岩の風化に由来したもので、昭和十五年頃より採掘された。横似町には前記マンガン鉄工業の原料たるマンガン鉱を採掘し、昭和二十六年には一、一四九屯を出している。

### 2 クローム鉱業の発展

日高のクローム鉱業は、明治の末年後藤彦三郎が日高の蛇紋岩地帯にクローム鉱の賦存を信じ、探査したのが嚆矢であつて大正二年はじめてクローム鉱の存在を発見した。同人は、大正六年ニセウ附近の試掘鉱業権を買収して事業を開始し、大正六年には約二千屯を出鉱した。大正八年には日東本山の大鉱体を見出し、日東クローム鉱業株式会社を創立したが、大洪水のため本山諸設備を流失し、また財界不振のため一時休止、昭和四年後藤合名会社に改組した。同六年新日東の鉱体を見出し、折柄の満洲事変等の軍需に應じて発展し、出鉱九、二二七屯(昭一〇)に達する盛況を呈した。昭和十七年本山は日本製錬株式会社に譲渡され、十八年に本山に新鉱体が発見され、目下稼行中である。

八田鉱山は昭和二年、沙流川流域開発の一念に終始した八田満次郎が振内に事業を開始し、昭和五年鉱体に到達したが本鉱床は稀有の鉱量を有し、昭和十五年には出鉱二〇、一六九屯に達し、全国産額の六割をしめ、満次郎はクローム王の名を業界に馳せるに至つた。現在は需要減少のためもあり、出鉱を制限し新鉱体の発見に努めている。

本倉鉱山はニセウ川谷にあつて、昭和七年帝國鉱業株式会社によつて開発され、後日本ステンレス株式会社となり、昭和十年には一千屯の出鉱をみた。薄平鉱山ははじめ製炭夫によつて発見され、後木材界の手腕家富本朝二の手中に帰し、昭和十三年より本格的採掘に着手した。昭和十八年の盛時にはよく二、一四二屯を出した。

昭和二十六年度中における各山の生産及び従業員は次の通りである。(本倉鉱山出鉱なし)。

日本 鉱業所

三、四六四屯

三六八人

糠平 鉾山 三二一〃 四五〃  
八田 鉾山 六〇三〃 二七〃

日高村においては、八田右左衛門鉾山、三井千露呂鉾山、石富（千栄）鉾山等があり、現在は休山しているが相当の出鉾をみた。また三石町における蛇紋岩からもクローム鉾を出したが、少量にとどまった。昭和十六年における日高管内の試掘権設定は次の通りであつた。

沙流郡	一三五
静内郡	七
三石郡	二七
様似郡	一四

#### 八 クローム鉾業の躍進

一一三

#### 第四編 新時代への歩み

一一四

### 九 工業の漸進

#### 1 木材工業

日高の工業は、その豊富な森林資源に依存して発達してきた。遠く幕政時代に幌満に造船が行われたことや、西舎製軸（マツチ）所（明治二十九）奥山製軸工場（富川明治三十九年）などがあり、また一般製材は明治三十五年幌満に日高製材木工場、四十四年に冬島木工場などが操業を開始した。

大正十三年には様似村に幌満木工場、浦河町乳香、名古屋、向別の各木工場、三石村歌笛木工場、新冠村峰村木工場、佐瑠太村衣川木工場等をかぞえ、主に板角に製し樹種によつては足駄函、下駄樺或は桶板鉛筆材等にして移出した。その額は凡そ二十万石内外であつた。

昭和二年佐藤真一郎が平取に木工場を開き、昭和七年石崎嘉一郎が芽生に造材所を設け、十年に荷負に移つた。昭和九年成田長次郎は平取に合板工場を設け、のち吉田豊八に譲つて吉田ベニヤとして一時活況を呈したが、間もなく経営難に陥つて閉鎖した。石井春雄は昭和十三年ころに製材工場を営み、家具その他の加工業をおこなひ、また札幌に工場を設けて軍需用品等によつて大いに発展した。更に昭和十八年には本州方面の資本を導入して富川に石井合板工業株式会社を設けて軍需に応じ、発展の波に乗つた。富川では古い衣川木工場は閉鎖して谷崎木工場が出来た。石井合板は終戦と共に閉鎖したが、岩倉組木工場として製材及び合板を営み、現在従業員約百名を擁している。

静内に木工場がはじめて出来たのは昭和二年で、後静内製材会社が一般材及びインチ材の製材を営み、池内ベニヤもできた。現在従業員一五〇名に及び、合板の大部分を東京に移出している。また同所の日高物産株式会社は、バット、スキー、薄経木等を製作し